

続・ 珈琲の思い出 41

鈴木優子

「じゃあ、火曜日の夜、19時に駅の南口にね。あ、和樹さんの車は何色？」

「シルバーのレガシーだよ。ナンバーは7573。」

「OK！ありがとう！じゃ、火曜日にね！」

「え、もうそれまでメールとかしちやいけないの??」

「いに決まってるじゃん！」

「ねえ、優子さん、お名前はなんて呼んだらいいの？優子さんじゃ、他人行儀な感じがして。」

「え……!?友達とかはそのまんま『優子』って呼ぶよ。」

「じゃ、僕の方が8歳年上だから『優子』って呼ばせてもらうね。」

「うん、私は和樹さんのままでもいいかな？」

「いいよ、優子、早く会いたいな♡」

「嬉しいワン！」

「ああ、かわいい優子、抱きしめたい！」

「いいよ！」

「うーん……、そんな言われるとガマンできなくなっちゃうぞ！」

「いいよ♡」

「また……そんな殺生な……」

「ごめん、主人たちが帰ってきた。またメールするね！」（続く）